昭和４５年夏。

宇和島市上空で、街全体を揺るがす轟音(ごうおん)が鳴り響いていた。

しかし、僕達はいっこうにおかまいなく部活の練習に取り組んでいた。それが、日常であった。

当時、僕らの生活のなかでベトナム戦争は日常だった。ベトナムでは枯葉剤(かれはざい)が撒かれ戦闘が繰り返され、多くの兵士、民間人が死んでいった。それを、僕達はテレビのニュースとして、毎日頭の中に叩き込まれていた。

しかし、特別な情報統制はなく、誰でもが、肯定または否定的な目でみることができた。民主主義の成果であることは疑う余地もなかった。もちろん、アメリカ側にとって都合の悪い場面、一般お茶の間むきでない、残虐で刺激的なシーンはカットされていたが。

そして、僕らの生活の中に、それをよりいっそう日常的にしていたのが、岩国基地(いわくにきち)あたりからのベトナムへの空爆だった。

毎日、決まって行われる出撃は、戦闘機が宇和島

上空を通り、ベトナムへ向かった。その戦闘機が通過する際、おそらく、宇和島を目安に音速を突破するよう指示されていたのだろう、ソニックブームと呼ばれる衝撃波(しょうげきは)を発した。

　それは、とてつもなく大きな音で、小さな宇和島の街全体を揺るがすには、十分すぎるほどだった。

　しかし、僕らは、もっと子供の頃からそのなかで暮らしてきたので、そういったものだと理解していた。

「一足一刀一びょおおし(いっそくいっとういち)」部活顧問の土居先生が、首をフラミンゴのように伸ばしながら、震える声で叫んでいる。

　僕らは、それを念仏のように聞きながら、竹刀を振っている。特別その意味を考えたことはない。ただひたすら、竹刀を振っている。

　六月の市内予選で三年生が敗退し、部活に来なくなってからは、僕らの天下だった。

　もともと、三年生は、後輩をいじめる事以外は、部活動にあまり熱心で無かったので、勝てる筈もな

く、用が無くなれば、さっさと引退してしまったのである。そのうっ憤を晴らすかのように、僕らは、余計な雑音を入れまいと、黙々と稽古をした。

「よし、やめー！」

キャプテンの敦夫(あつお)が、その中学生に似合わない髭面(ひげづら)で叫んだ。

僕らは竹刀を振るのを止め、整列着座をし、面をはずし、順次礼を重ね、稽古を終えた。

土居先生はそれを見届けると、早々と体育館を出て行ってしまった。先生にしても、さほど積極的に剣道を教えようという様子でも無かったし、僕らもそれをあてにしてはいなかった。

僕らの目標は、とりあえず県大会に出ること、そしてそれに優勝し、全国大会に行くことだった。あわよくば全国大会優勝という、だいそれた目論見(もくろみ)もふくめて。

「おい、満(みつる)。お前、裏の揚げ饅(あげまん)屋へ行って、アイス買うてこいや」

正美が、一年生の満に、みんなから集めた小銭をジャラジャラと渡した。

満は汗を拭く間もなく、先輩達の為に、学校の裏で揚げた饅頭を売っている店に走って行った。
「暑いなあ、なんでこんなに暑いんや」
二年生の西が、額から汗を滝のように流している。
「あつくるしい奴っちゃな。よるな、よるな」
僕はしっしと、追い払う様に、西に向けて手振った。
「そりゃお前、こんなもん着て、こーんなことして、あーんな声出して走り廻っとたら、あついやろ」
正美が、口を歪めて皮肉っぽく笑った。
実際、防具と胴着(どうぎ)とで十キロは超えている。
僕ら二年生は六人いた。
キャプテンの敦夫、正美、西、春樹、加藤、そして僕だ。そして、一年生は満を含め五人、そのうちレギュラーは五人だ。たいして競争率は高くなさそうだが、二年生の実力は拮抗(きっこう)しているので、かなり競争は厳しいといえた。
放課後の部活を終えると、午後六時を過ぎている。
七月とはいえ、多少過ごしやすい気温になっている。他のクラブもおおむね練習をやめ、バックネッ

トの裏にある部室に引き揚げている。野球部だけがネットの向こうで、声を張り上げていた。

「精が出るこっちゃのう」

　正美が、ふふんと鼻を鳴らした。

　当時、野球部というのは、その強い弱いにかかわりなく、なぜか華やかで優遇されていた。他の部活の連中が苦々しく思っていたのを、当の本人達はご存じなかったのである。

　僕らは、部室に戻ると、満が買ってきた一本十円のアイスをぺろぺろと舐め、あるいはガジガジと齧り、少しでも涼を得ようと努力した。

「今度の新人戦（しんじんせん）のことなんやけどな」

　敦夫が言う。

　誰も食べるのに夢中で、返事をしない。敦夫は、暫く皆の顔を見廻（みまわ）していたが、諦めて食べかけのアイスをくわえ込んだ。

「ああ？なんだって」

　西が、間のびした声を出した。

「いや、新人戦のメンバーを、そろそろ決めておかないとまずいかなあと思って。その、なんだ、その

時になって、急にも決めれんだろうし」

　敦夫は早口に言った。

「そんなもん、一週間リーグ戦でもやって、決めたらええことないかい」

　正美が言う。

　二年生は誰も異存がない、誰も自分がレギュラーから外れるとは思ってないからだ。一年生は、もとより意見を言う立場に無い。

　夏なので、部室の厳(いか)めしい鉄のドアは開いている、薄暗い室内に、所々はめ込んである幾何学模様のように穴のあいたブロックから、光が差し込んでいる。

　蝉が鳴いている、ミンミン蝉だ。蝉はミンミン蝉から始り、西日本が南限のクマ蝉、油蝉と続き、ヒグラシ、つくつくぼうしで終わる。

　暫くそうやって過ごした後、僕達は家路についた。

　校門を出ると、左右に分かれる。敦夫以外は皆右に折れる。しかし、敦夫には連れが待っている。

　敦夫と同じクラスの永井真理子だ。真理子は、つまらなそうな顔で、校門を出た右の隅に立っている。

　まあまあの美人だが、誰も振り向きはしない、真

理子は自閉症だ。時折、通行人が横目で一瞥(いちべつ)をくれている、しかし、生徒数千人を超える中学校だが、誰もがその事を知っていた。

敦夫は真理子を見つけると、その長い顔に笑みをうかべた。

「待たしたかのお」

じじくさい言い回(まわ)しだ。

実際、敦夫は他の中学生にくらべると老成(ろうせい)していた。よくいえば、大人びた風貌(ふうぼう)をしていた。

真理子は首を横に振った。

僕らは、二人が皆と反対方向に歩いて行くのを、少しの間見ていた。

「わからんのお」

正美が口をとがらせた。

「何が」

僕は、ずり落ちそうな肩掛け鞄を右手でたくしあげた。撫(な)で肩の僕には、すぐにずり落ちてくる肩掛け鞄は苦手だった。

「あんな、自閉症で癲癇(てんかん)持ちの女のどこがええんや。

しっとるか？あいつ、しょっちゅう癲癇の発作起こして小便もらしとるのを、ボサ公がせっせと床拭いてやっとるんやで」

　ボサ公とは敦夫のあだ名だ。

「美人やからやろ」

　春樹が、鼻にかかったような声で言った。

「あのスケベが」

　西が、ぶつぶつと、つぶやくように言った。

「そやけど正美（まさみ）、お前それ、牧師の息子にあるまじき発言やな」

「またその話か」

　正美は、その青い眼で加藤を横目で睨（にら）むと、ちえっと舌打ちした。

　正美の父親はカトリック教会の神父だ、戦後間もなくドイツからこの街にやって来た。附属している幼稚園の園長も兼ねている。母親は日本人で、妹が一人いる。そういった家族構成だった。

　ドイツ人の家庭で、しかも神父の家庭だから、厳格な事このうえない筈。はたしてその通りだった。

　しかし、そんな父親を正美は好いていない様子だ

った。そのせいか、正美は妙にシニカルで、なげやりなところがあった。

「敦夫ちゃん、いつもすまないね」

椿の生垣(いけがき)のところで、真理子の母親の恵子が礼をいう。

真理子は振り向きもせず、じゃあねと右手を軽く振って玄関に向かう、母親と敦夫はそれを見送る。

「なんだろねあの子は」

恵子は溜め息をついた。

「今日は機嫌が悪いんやろ、心配せんでええよ、おばさん」

「ほんとに、敦夫ちゃんの方が、あの子の事よう解(わ)かっとんさるのよな」

恵子は敦夫を振り返り、笑おうとしたが唇(くちびる)が少し歪んだだけで、逆にもの悲しい表情になった。

敦夫は家に帰ると、鞄(かばん)を薄暗い部屋の片隅(かたすみ)に放り出した。家には誰もいない、昼間は父親も母親も働きに出ている、兄は去年高校を卒業すると、就職し

て神戸に行ってしまった。

　敦夫は、荷物が、そこらじゅうに無造作に置いてある部屋の隙間（すきま）に、あおむけに寝っ転がって目を閉じた。

　ほんの十分程うとうとしたが、帰ってきた母親に肩を揺すられて、目を覚ました。

「敦夫、はよ起きて風呂にいきないよ」

　母親は、近在（きんざい）の出身なので、少し宇和島の言葉と違うところがある。

「いま帰ったばっかりなんで」

　敦夫は寝っ転がったまま、不服そうに顔をしかめた。

　真理子は、風呂から上がると、夕飯をすませ、家の東側の端にある自分の部屋に閉じこもった。それが日課だった。

　部屋に入ると机に向い、その日の復習、予習をする、別に勉強が嫌いなわけでも、できないわけでもない、ただ、授業中に手をあげて発表することも、クラスで誰かと話すこともない。敦夫に対してだけ

少し話す、しかし、能弁(のうべん)になるということではないのだ。

いつからそうなったのかは、はっきりとは判らない、気がつけばそうなっていた。小学校の低学年の頃は、みんなと一緒に遊んでいたような気がする。

少し冷たい夜気(やき)が網戸越しに入ってきた。窓の外には庭があり、金木犀の木が、二メートル程の枝をのばしていた。さらにその外には道路があり、向こう側は川だった。その川からの風もあった。そして、水の流れる音も規則正しく、心地よく聞こえていた。

膝の上に、ふわりと柔らかいものが乗った、同時に温かい感触が肌に伝わった。黒い塊の中から、ひかる眼が二つ真理子を見ている。

猫のチロだ、もう二十年前から家で飼っている、真理子が生まれる前からこの家に居るらしい。チロは、膝の上にまるまって、ごろごろと喉を鳴らし始めた。

真理子は、その先輩家族を乗せたまま、椅子に座り直した。

「正美、正美は何処へ行きましたか」
　下手くそな日本語で父親が呼んでいる。
　日曜の朝の礼拝なんぞしたくもないと思っている息子は、とうのむかしに部活に出かけて、居る筈はない。
　わかっていて、わざと大声を張り上げているとしか思えない、シュトラウス家の日曜日が始まった。
「兄(にい)ちゃんならクラブ活動に行きましたよ」
　一つ下の妹が答える。
「おお、エルナ、困った奴ですね」
　父は、苦虫(にがむし)を噛み潰した顔をしている。
「できれば、私もクラブ活動に行きたいのですが」
「あなた、いつからクラブに入ったのですか？」
「先週です、茶道部にはいりました。ママには言ってあります」
　父は、今度は、苦虫(にがむし)を通り越して、毒虫(どくむし)でも噛み潰したかのような顔になった。
「いけません、絶対に！」
　エルナは、父親の形相(ぎょうそう)に気(け)おされて黙ったが、すぐに、なにくわぬ顔でその場を立ち去った。

あとには、鬼のような顔をした父親がとり残されたのである。

シュトラウス家はドイツでは名門だ。しかし、父親のセバスチャンは、跡取りではなかったので、家を出る道を選んだ。

したがって、もともと育ちが良いせいか、世の為人の為に尽(つ)くそうというのが、彼の信条であり、選んだ道であった。

僕らはよく練習試合に出かけた。

大抵は、敦夫が段取りしてくる相手の所へ、なかば強引に押し掛けるといった体(てい)だった。

夏休みに入っているので、朝から出かける事にしているが、なにせ暑い。まだ八時半だというのに、駅前のアスファルトの上には、かげろうが揺れている。

皆は、それぞれ防具袋(ぼうぐぶくろ)と竹刀袋(しないぶくろ)を持っている。但しそれは学校の備品であり、個人の物ではない。よって、それらは継ぎはぎだらけで、おそろしくボロい。その中から、比較的綺麗なものを選んで持っ

てきている。一応対外試合なので、体裁（ていさい）というものがあるのだ。

駅前には、田舎町にしては多くの人間が行き交っている、旅行者もけっこう多い。

いきなり、早朝にもかかわらず、ドカーンという衝撃波のけたたましい音が空から降ってきた。

皆の目の前にいた男が、眼をまるくして、辺りをきょろきょろと見廻している。そして、不安そうな落ち着きのない表情をうかべて、僕達のところにやって来た。

「いまのはなんですか」

たどたどしい日本語で話しかけた。

僕らは、男が妙なアクセントで喋ったので、おもわず顔を見合せて笑った。男はそれが不満だったらしく、怒ったように言った。

「なにがおかしいですか」

「いや、あれは戦闘機の音ですよ」

正美がかまわずに答えた。

男は、曖昧に頷くと、首をひねりながら去って行った。

男はラテン系らしく、小柄で、見た目もさほど日本人と変わらない。そんな奴がへんな日本語で話しかけてくれば、おかしいに決まっているではないか、と僕らは思った。

敦夫はまだ来ない、いつも遅れて来る。

その算段をして早めに集合時間を決めてあるのだが、それを見越しているのか、期待通りに遅れて来る。

「ちっ」

誰かが舌打ちをする、しかも二人同時にする。

焦ることはないのだが、と僕は思った。しかし、いちばんせっかちな性格をしているのは自分なのだ。

駅の東側の細い道に敦夫の影がみえた。茶色い帆(はん)布(ぷ)の防具袋を肩に掛け、竹刀袋を提げて、ガニ股で歩いて来る。

「すまん、すまん」

敦夫は眼を細めて愛想笑いをした。

僕達は改札を抜け、二両編成の列車に乗った。ディーゼル機関車で、電車はない。宇和島線という国

鉄の路線で、高知県の江川崎（えかわさき）というところまで行く、その途中の町の中学へ練習試合に行くのだ。

列車は、山間をのろのろと、しかしガーガーとやかましい音をたてて登って行く。だが、僕らは嬉しかった。ちょっとした旅行気分だったし、知らない相手と試合ができるのは、なにより楽しみだったのだ。

「おまえ、先週の金曜洋画劇場見たか？」

僕は春樹に話しかけた。

「大いなる西部やろ、見た見た」

「グレゴリーペックかっこええよな」

「いや、俺はチャールトンヘストンの方がええな」

春樹が答える。

「いや、お前はジーンシモンズのほうがええ筈や」

僕は皮肉たっぷりに笑い、指で拳銃をつくり、だんだーんと撃った。春樹は、うっと両手で胸を押え、向かい合わせの四人掛けの座席の隅に倒れこんだ。

それまで、にやにやして見ていた加藤が、おもむろに、防具袋の中から、なにやら手提げ鞄（かばん）のようなものを取り出してきて、声をひそめて言った。

西、春樹、僕の三人は身を乗り出して、加藤の手提げ鞄に注目した。
「実はな、この中には大事な物が入っている」
三人は一様に眉をひそめて、上目遣いに加藤を見た。
加藤は鞄のチャックを開け、中から取り出したものを窓際の棚にゴトリと置いた。
「おおっ」
西が目を見張った。
「コルト４５やないか」
それはまぎれもない、先週テレビで見た拳銃だった。しかも、それは金色に補修塗装されていない、黒光りするコルト４５のモデルガンだった。
「どしたんや、こんなもん」
加藤は、目を細めてへへと笑った。
「父ちゃんが、昔買うとったやつを持って来たんや」
「修正されて無いやつや、昔欲しかったんよな」
僕は、思わずため息をついた。
僕らは、代わる代わる手に取ったり、撃つ真似をしたり、あるいは振り回したりして騒いだ。

　加藤はそれを心配そうに眺めながら、少し後悔しているといった塩梅だった。
「やかましいなお前らは」
　正美が、反対の窓側の席から怒鳴った。
　通路を隔てた席には、正美と敦夫が座っている。僕らは、いきなり水を差されて、騒ぐのをやめ正美を見た。
「なんや、文句あるんかいな」
　西が正美を睨みつけた。
　正美は、ふふんと鼻で笑った。
「おまえら、そんなにアメリカがありがたいんか」
　刺すような言い方だった。
「なんの話や」
　西が言う。
「敗戦国のお前らが、そんなにアメリカがええんか、と聞いとるんや」
　なにを言っている、いいに決まっているではないか。自由の国だし、何よりなんでもある、僕達が食べたこともないような物が、ふんだんに食卓にある、当然僕らの憧れであり理想だ。しかし、それを言え

ば意地汚い気がして、僕らは黙った。

正美は、それを見透(みす)かすように、勝ち誇ったような顔をした。

「ええかお前ら、アメリカは自由自由と言うけどやな、それはアメリカの自由であって、他所の国の自由ではないんやど。アメリカの自由は他所の国の不自由に他ならんのや。アメリカ人は自由教の信者であり、ニクソンはフリーダム教の教祖なのや」

正美は一気にまくしたてた。

正美はまるでカトリックの神父のように、僕達に説教をたれた。それは、あたかも父親の影が乗り移ったかのようにみえた。

しかし、やはり僕達にとって、アメリカは憧れであり、理想であった。素晴らしいアメリカ、夢の国アメリカ、自由の国アメリカであった。

田舎の駅には、駅員が二三人居る、閑散として薄暗い、駅舎も木造で、全体がアンバー色だ。駅舎の中には、同色のベンチが置いてある。

老婆が一人、前かがみに腰を掛け、くつろいでい

る。

僕達は、改札を抜け、その前を通り、外に出た。午前十時をまわったところだった。

僕達は、田舎町の商店街を抜けると、少し高台にある中学校に向かった。そこまで一キロメートルはあろうと思われ、防具袋を引っ掛けた竹刀袋は、結構きつく肩に食い込んできた。

中学に着くと、敦夫の従兄弟(いとこ)が迎えに出て来た。

彼が剣道部のキャプテンらしい、敦夫と同じように長い顔をしている。

体育館に案内され、僕らは、早速(さっそく)着替えて準備体操を始めた。まず、手首の運動、膝、アキレス腱等のストレッチをし、素振りをした。

それから防具を着けると、基本打(きほんう)ちをすませ、試合稽古にうつった。午前中に済ませてしまおうという腹だった。

メンバーは、大体次のようなオーダーだった。

先鋒、次鋒（当時は次員といった)、中堅は、春樹、正美、西、加藤のうち三人が入る、副将が僕で大将が敦夫だ、但し、レギュラー落ちすれば順次組み

替える。練習試合では、入れ替えながら戦うといった手順だった。今日は一年生は来ていない。

両チームは、順番通りに整列し、互いに向き合って礼をし、先鋒が残って試合を始めた。

まず先鋒(せんぽう)の春樹は小柄で、胴(どう)が得意だ、相手が面を打ってくるのを受けとめて胴を抜いた。三分間三本勝負なので、二本取った方が勝ちとなる。その後双方決まり手がなく、時間切れで一本勝ちした。

次員の正美は、強引に小手(こて)を打ち、相手がひるんだ隙に、すかさず面を打ち込んで一本取った。更に、相手が小手を打ち込んでくるところを、後ろに引いて剣を抜き、面を打ち込んで勝った。

中堅の西は、小手を打ち込んで体勢を崩したところで、面を打たれて一本負けした。

副将の僕が、小手を打ち込み、得意の引き面で二本勝ち。

大将の敦夫は、老獪(ろうかい)な剣で一本勝ちをした。

実際、敦夫の剣は遅く、僕に言わせれば、蝿が止まりそうなのだが、みょうに強い。

その日は、メンバーを入れ替えながら三回試合を

したが、何れも圧勝し、僕達は満足したのだった。

　まだ、課題を見つけることより、取り敢えず試合経験を積むことが先決であり、大事であると、僕達は考えていた。

　夏が終り、季節は秋に移ったが、九月はまだ暑い。

　教室の窓越(まどご)しに、ぼんやりと遠くの山を見ている、日に照らされている山は、緑がまだ濃く、絨毯(じゅうたん)の様で、そこに寝そべれば気持ち良さそうに思われた。

「大内君、大内君」

　誰かが僕を呼んでいる。

　僕は、はっとして声の方を振り向いた、同じクラスの芳村(よしむら)の顔が大きく目に入った。芳村は、僕を覗き込んでニヤニヤしている。

「また変なこと考えてたんでしょ」

　そう、僕には妄想癖(もうそうへき)があった。しかし、決して変な事を考えている訳ではない。

「失礼やな、俺は真面目な少年なんやど」

　芳村は、シングル盤のレコードを差し出した。まだ真新しいジャケットに入っている。

「これ、この前話しとったやつ」
「あっ、貸してくれるのか」
　僕は、それを受け取ると、裏表をひっくり返して丹念に見た。それは、流行っている洋楽のシングル盤だった。
　僕と芳村、そして、芳村の後ろに立っている長身の大橋勝は、趣味の音楽仲間だった。
　大橋に至っては、エレキギターに凝っている。
　一方僕は、楽器はまったく駄目だった。だいいち、おおよそ器用さというものが無い、まるで指先に神経が通って無いかのようだった。
「そしたら、借りとくよ」
　僕は、そそくさとレコードを肩掛け鞄に仕舞い込んだ。
「どうぞ」
　芳村は、色白でフランス人形に似た顔を、少し傾げて笑った。

　真理子は、気が遠くなりそうなのを必死に堪えていた。このままでは、また失禁しそうな気がして怖

かった。

敦夫は授業に退屈していた。というより、元々あまり授業を積極的に聞こうという気持ちが無いのだから、当然であった。

敦夫は、先生の話を聞くでもなく、しかしきょろきょろしていては体裁(ていさい)が悪い、といった状態で、じっと机にしがみついている、という格好だった。なにせ、何故か敦夫はクラス委員長をしているのだ。まったくもってそれは何故か、というに相応(ふさわ)しい話だった。

おおよそ、敦夫は勉強というものはまったく出来なかった。おそらく、クラスの中で敦夫より成績の悪いやつはいないだろう。

それにも係(かかわ)らず、クラスの連中は敦夫を選んでいる。選ぶ方は良いかもしれないが、選ばれた本人は迷惑なはなしだと、僕らは思っていた。

では何故、お前達は敦夫を部長に選んだのだ、と聞かれる事と同じだと、思いつきもしなかったのである。

敦夫は、何気なく、すぐ斜め前の廊下の窓際にあ

る真理子の席に目をやった。

　真理子は左手のこぶしを強く握っている、そのこぶしが小刻みに震えていた。

「あっ」と敦夫は小声で叫んだ。

「先生!」

　敦夫は右手を上げて立ち上がった。

　担任の嶋瀬は、急に立ち上がった敦夫を、怪訝(けげん)そうに見た。

「永井が」

　敦夫が口籠(くちごも)ると、嶋瀬はすぐに合点(がてん)した。

「連れ出していいぞ」

　敦夫は、真理子を抱き上げるようにして席から離そうとしたが、真理子は中学生にしては大柄なので、いつも苦労をする。仕方がないので、皆に手伝って貰って、敦夫は真理子を負ぶって外に出た。

　廊下に出て、二三歩歩かないうちに、真理子は失禁(しっきん)した。

　敦夫は、暫くそこで立ちすくんだ。

　真理子の尿が背中に冷たく感じられて、敦夫はようやく、ああと声をもらした。

真理子は、負ぶさったまま泣いていた。
「ごめんなさい」
「ええよ」
敦夫は、肩越しに真理子を振り返るようにして笑った。
「俺、ちょっと雑巾取ってくるけん、真理ちゃんここに居ってくれん」
敦夫はそう言うと、真理子を背中から降ろして、長い廊下の端に置いてある雑巾を取りに行った。
敦夫はバケツを二個持ってくると、馴れた手つきで床を拭いた。
校舎は木造で、茶色く変わった木の色が空間全体を支配している、大きく長く開いた木の桟の入ったガラス窓からは、外の森の木々からの木漏(こも)れ日が差し込んで、しゃがんでいる真理子の顔を薄緑(うすみどり)に染めている。
校庭には何故か山があった、それも築山(つきやま)ではない自然の山があった。それが、校庭の三分の一を占めていた。
もうすぐ秋から冬になれば、生徒達は、落ち葉の

掃除に追われることになる。

　敦夫は真理子を負ぶって廊下を歩いた。

「おもたいやろ」

「かるいよ」

「うそ、敦夫君細いから」

「よたっとるかな？」

「だいぶね」

　二人は保健室に行く途中の、給食を搬入する為に、大きな空間になっている場所で座り込んだ。そこは、木々に光を遮(さえぎ)られて薄暗かった。

　森に向って大きく入口が開いている、それと同じように反対側にも搬入口が開いていた。

「ねえ」

「なに？」

「なんで私みたいなのにやさしいの？」

「わからんよ」

「おかしいよ、それは」

「俺は、頭が悪いから」

「真理ちゃんみたいな頭のいい子にあこがれるんよな」

「私、そんなによくないよ」
「いいよ、俺よりはずっと」
　敦夫は嬉しそうに笑った。

　セバスチャン神父は、なにくわぬ顔で説教を終えた。いつもと変わらない様子だったが、実際は、いまいましさで、はらわたが煮えくりかえって、どうにも治まりが着かない状態だった。事実、説教の途中で、声が裏返ったりした場面が二三回あった。
　神父は、自分の書斎に戻ると、煙草に火を点けて、せわしなく吸った。
　煙草は両切りの安物で、時折葉っぱの屑が口の中に入ってきて、それをぺっぺっとそこら辺りに吐き散らした。
　コンコンと、書斎のドアを叩く音がした、力強く無遠慮な叩き方に、多少なりとも治まってきていた気持ちが、再び燃え上がりかけたが、やっとのことでそれを抑え込むと、暫く間を置いて、どうぞと言った。
　ドアが開いて正美が入って来た。

「呼びましたか」

正美は躊躇(ちゅうちょ)なく尋ねた。

セバスチャン、はいまいましさを押し殺して、目の前の椅子を指差した。

正美は何気ない様子で、差された椅子に座った。

父親が怒っているのは明白だったし、何故怒っているのかも充分承知していた。

セバスチャンは、机を背にして正美と向き合って椅子に座っていた。肘掛椅子に両肘を置き、胸の前で指を組んでいた。指はせわしなく動いているが、目は正美を見据えたままだ。

セバスチャンは口を開いた。

「正美、何故呼んだか分かっていますか」

「いえ、いっこうに」

正美は素知らぬ顔で答えた。

「今日、私の知り合いから話がありました。その人は警察の補導員をしています」

父親はそこまで言うと、息子の顔色をうかがった。

しかし、息子は相変わらず、何のことか解らないといった顔をしている。

セバスチャンは、とうとう声を荒げて言った。
「あなた、街のスーパーで万引きをしましたね。そういう話を聞いたのです。どうですか、答えなさい」
正美は、さすがに少し神妙な顔になり、じっとセバスチャンを見つめた。
最初から分かっていた話なのだが、かと言って、素直に謝る気持ちがあった訳でもなかった。
正美は、暫く父親を見つめたあとで、そのまま黙っていれば、ずっと口を開けなくなってしまいそうな感覚に捕われて、無理に言葉を発した。
「しました」
その言葉は、自分の意に反して妙に神妙(しんみょう)に響いたので、父親はいくぶん満足そうに頷いた。
「何故そんな事をしたのですか」
父親の言葉は、少し優しくなっていた。
何故と言われても、べつに特別な理由があった訳ではない。ただ欲しかったし、お金は持っていなかった、それに、万引きが流行(はや)っていた。
それぐらいしか思いつかなかった。もっと深い理由なんかは、正美自身にも分る筈はなかった。

「答えなさい」
　追い打ちを掛けるように、セバスチャンは容赦なく言った。
「僕はどうなるんですか」
　正美は聞いた。
　父親は、眼をつぶって眉間（みけん）にしわを寄せた。
「どうにもなりません、今回は許して貰いました」
　正美はそれを聞くと、ほっとして思わず唇がゆるんでしまった。しかし、それを父親は見逃さなかったのである。
「それは答えになっていません、私の質問に答えなさい」
　セバスチャンは、再び強い口調で問いただした。
　正美には、もうこの場を何とかしてやりすごす道しか残っていなかった。見つからない答えをいくら訊かれても、返事のしようがなかった。
　どうしようかと迷った挙句、さっき部屋に入る前に母親から聞いた話を思い出した。
　父親に気を使って、話がすんだら言うように言われていた。

「ああ、言い忘れてました。来村(くのむら)のお祖母さんの容体が急に悪くなったそうです」

父親はふいをつかれて、おもわず目を見開いて正美を見た。

「それは、いつの話ですか？」

「部屋に入る前です、ママに聞きました」

セバスチャンは椅子から立ち上がると、急いでドアの方に行きかかったが、正美の方を振り返り、何か言いたそうに口を動かせたが、言葉にならなかった。不肖(ふしょう)の息子に係っている場合でないことは明らかであった。

セバスチャンは正美を無視すると、踵(きびす)を返してあたふたと出て行ったのである。

十月も終わりに近づき、僕らは、新人戦の準備を着々と進めていた。

先週行われた、市内の新人戦では団体戦で準優勝をした。

準優勝をしたといっても、四チームしか無いのだから、その二番目ということであまり威張れたもの

ではなかったが、とにかく収穫はあったのだ。

なにしろ、僕らの目的は十ヶ月後の県大会なのだから。

そして、僕は、その大会の個人戦で準優勝したのだった。しかし、準優勝した事が収穫だった訳ではなかった。

僕は、その大会の個人戦で密(ひそ)かに優勝を狙っていた。口に出すと他の連中に警戒されるので、あくまで密かにだ。

僕は一回戦からとばした、後ろ向きにダッシュするといわれた引き技(わざ)を多用し、とにかくスピードと反射神経を駆使し、圧倒的な勝利で決勝戦まで勝ち上がった。

決勝戦の相手は、優勝の常連の南中の馬場だった。

馬場の剣道は速かった、しかし、僕は密かに、これもまた密かにだが、速さでは負けない自信があったのだ。

始め！、の声が掛かると、僕は様子を見た。

馬場は僕が前に出ないのを見ると、いきなり面を打ち込んできた。

その面はなんなくかわしたが、返し技を出すことはできなかった。

さすがに速かった。

僕は、馬場の竹刀を小さく牽制(けんせい)し、馬場の手元が上がった瞬間に小手を打ち込んだが、拳(こぶし)を打ち、不十分だった。

そのまま互いに鍔迫(つばぜ)り合いの状態になり、僕の得意な格好になった。

僕は密着した状態から、間を計り、一気に得意の引き面を打った。

しかし、馬場はそれを竹刀で受け流した。

僕の竹刀は馬場の竹刀の上を滑り、僕の体だけが後ろに飛んだ。

そんな戦いが暫く続き、時間切れとなり、延長戦にもつれ込んだのである。

延長戦に入っても、僕はまだ余裕があった。

それまでの戦いで、僕の剣の方が馬場より速いという確信を持っていたのである。僕の優勝は目の前だった、筈だった。

しかし、僕は敗れ、準優勝に終わった。

しかも、団体戦ではなんでもない相手に負け、一勝も挙げることは出来なかったのである。

つまり、僕にはスタミナが無かったのだ。延長戦では、僕は、自ら相手に打たせざるをえなかったのである。

しかし、わざと打たせる訳にはいかない、格好をつける必要があった。僕は馬場に面を打たせ、遅ればせながら返し胴を抜いた。それで精一杯だった。

その後に行われた団体戦には、残念ながら体力が回復してなかったのである。

それは、僕に限ったことではないのだと、僕はその時気づいたのだった。

早い話が、それが僕の、そして僕らの収穫だった。

それ以降、僕は団体戦より先に行われる個人戦は捨てた。と同時に、相手の主力選手を疲れさせるという、姑息(こそく)な作戦の場と化したのである。

次の試合のメンバーは、その都度(つど)一週間のリーグ戦で決めた。

オーダーは、成績に関係なく、その個性と作戦に

よって決められた。たとえば、先鋒(せんぽう)はとりあえず無難に勝ちを拾う為に、春樹を置くとすると、この場合は、先鋒というのは大抵他所(よそ)のチームでも、なかんずく実力のある奴が置かれるので、引き分けでも良いのである。

　すると、変則的な技を使い、なおかつ守りの堅い春樹はうってつけなのである。

　次に次員(じいん)だが、ここは他所のチームが手薄になるところなので、強引な剣道の正美があたり、確実に勝ちを拾う。

　中堅(ちゅうけん)は、西、加藤でなんとか勝つ。

　そして、これも他所が手薄になる副将は、速い剣道の僕が確実に勝つ、という算段だった。

　しんがりの敦夫は、計算には入っていなかった。

　確かに、敦夫は強い。チーム内でリーグ戦をしても、一二を争った。しかし、他校の大将はもっと強かった。おまけに、敦夫のスローな剣道では、まるっきり勝てないのが分かっていたから、僕らは敦夫をあて馬に仕立てたのだった。

「なんや、俺は全然期待されとらんのやな」

敦夫は、情けなさそうに肩を落とした。

「あたりまえやろ、お前が馬場や善家(ぜんけ)に勝てるか」

正美が冷たく言った。

皆も、当然といった顔をする。

実際、敦夫はその二人に勝ったためしがない。

個人戦でも、よく決勝までいくのだが、いつもその二人に負ける。

団体戦でもそうだった、余程(よほど)相性が悪いのか、あっさりと負ける。

そのイメージが強いせいで、確実性を不安視(ふあんし)されていた。そういう訳で、副将や中堅にもまわせなかったのである。

「そやからな、先鋒、次員、中堅で確実に二勝する、そして、次の健一(けんいち)で決める」

正美の言葉に促(うなが)されるように、皆は僕を見て頷いた。

確かに、僕は、実力が下の相手には確実に勝った。そういう意味でも、皆の選択は妥当だといえた。

「今日は武道館へ行くのか」

加藤が、誰にとはなく聞いた。

「あそこはいかん」

西が答える。

皆も頷く。

元々、一年生の頃はよく行っていた市の武道場だったが、最近は、めっきり行かなくなった。

行けば、大人の有段者、高段者に稽古をつけて貰えるので良いのだが、そこは、南中の連中の出身母体なので面白くないのだ。

特に、南中の松本は、子供の頃からそこに所属している、いわば剣道エリートで、いけすかない奴だったのである。だから、僕らならずとも、他所の連中は、皆彼を目の敵にしていた。

松本にしてみれば、随分と迷惑な話であった。

つまり、だから、イカンという訳なのである

「それはそうと、一年生の山本の見舞いはどうする？」

敦夫が、胴紐（どうひも）をほどきながら、しかし、それが中々上手（うま）く行かないので、力一杯引っ張りながら言った。

そうだ、すっかり忘れていた。

先週、三年生の先輩が珍しくやってきて、一年生を相手に稽古をしたのだった。

下級生をいじめるのが趣味の先輩は、何か面白くない事があったのか、後輩をいじめようと、意気揚々とやって来たのだが、いかんせん、二年生には、もう既に、その先輩にいじめられるレベルの奴は、一人もいなかったのである。

二年生に軽くあしらわれてしまった先輩は、仕方が無いので、今度は一年生に目を付けたのだった。

僕らは、いつもの事なので、別に気にもしなかったが、それが裏目となり、一年生の山本が、脳天に巨大なタンコブを作り、近所の整形外科に入院してしまったのである。

当然、山本の親は怒り狂い、退部騒ぎに発展していた。

オーマイゴッドと、こういう時、ハリウッドの俳優なら言うだろう。

「行かないかんだろ」

僕は、テンションの下がるのを感じながら言った。

「誰が行くんや」

春樹が、人差し指で鼻をほじりながら、素知(そし)らぬ顔で言った。
「おまえ、逃げる気か」
正美が睨(にら)んだ。
春樹は、慌てて目をそらすと、今度は片手でごしごしと両目を擦(こす)った。
「みんなで行けばええやろ」
敦夫が珍しく自分の意見を言った。
皆は、異存が無いようだった。それぞれ、所在無げに首をひねったり、指で額を掻(か)いたりしている。

僕らは、街で見舞いの菓子を買い、整形外科の病棟を訪ねた。
山本は、ベッドに横になっていたが、元気そうだった。
母親が付いていたが、僕らはあまり歓迎されている様子では無いのが、その表情からありありと伝わって来た。
山本は、頭の天辺(てっぺん)を大きなガーゼで被い、その上から白いネットを被せていた。

「どんなぞ？」

　敦夫が、ベッドの上で体を起こした山本に声を掛けた。

　まあ、と曖昧(あいまい)に答えた山本に代わって、母親が横から答えた。

「まだ、腫(は)れが引かんのですよ、骨とか脳とかには異常は無いんですけど」

「ああ、良かったです。僕らもだいぶ心配しとりましたけん」

　敦夫は言い、僕らは素直に喜んだ。

　その後、暫くそこに居て、僕らは病院を後にした。

「はよ元気になって、出て来いよ」

　病室を出る前に、僕は山本に声を掛けた。

「もう、剣道はちょっと、無理なんですよ」

　母親が間髪(かんぱつ)を入れずに答えた。

　山本は、ベッドの上でうつむいた。

「情けないやっちゃのう」

　帰り道で、正美がぶつぶつ言った。

「そりゃ無理やで、俺らが丈夫過ぎたんや」

西は、横目で僕らに目配せをした。

大体において、強いストレスに耐える連中がそこに居ると、ストレスを与える方は、それが当たり前だと思ってしまう。

「それが、三浦さんの敗因やな」

加藤が言う。

「人ごとやないで、活動停止になったらどうすんのや」

僕らの足取りは重たかった。

もう十一月が近いというのに日差しはきつく、道路のアスファルトが柔らかくなって、足の裏にへばり付くような気さえした。

しかし、幸(さいわ)いなことに、僕らが恐れていたような事にはならなかった。学校からはなんの通達もなく、それは、山本の親が気を使ってくれたのか、学校側が、特別に問題視しなかったのか、とにかく、僕らは、元のようにクラブ活動を続けることできたのである。

そして、僕らは、南伊予地区の中学校が集まって

行われる、南予新人戦に出場し、クレバーでせこい作戦を展開し、みごと準優勝したのだった。

大会には、十八チーム程度が出場し、優勝を争った。

その大会に準優勝した事は、僕らにとって大きな意味があった。それは、今まで、県大会すらほとんど出場した事が無い先輩達の呪縛(じゅばく)から、解き放たれた瞬間だった。

僕らは、口で言うほど自信があった訳では無い、それだけに、それは大きな自信となって、僕達のモチベーションをさらに引き上げたのである。

正月が近くなり、それぞれの家では、餅つきのぱんぱん、という音が聞こえる様になってきていた。

僕の家でも、以前兄が居た頃には、餅を玄関先でついていたが、その兄が大学に行って居なくなってからは、やらなくなっていた。

「おーい」

玄関で声がした。

母がその声に応えるように出て行った。

母は、台所に戻ると、焼酎をガラスのコップに一杯注いだものを玄関先に持って行った。焼酎は白く濁っていて、粕取(かすと)り焼酎のいい香りがした。

玄関には、父方の祖父の姿があった。

祖父は、玄関先に腰かけて、旨そうに出された焼酎を、ちびりちびりと飲んだ。

僕は、冬休みでたまたま家にいて、その祖父と対面してしまった。

「元気でやっとるか」

祖父は、にこりともせず言った。

祖父は、眉毛が太く目がぎょろりと大きく、あからさまに熊襲(くまそ)の系統の顔立ちをしていた。

もともとは船乗りで、そのせいか父も船会社に勤めていた。

性格的に気性が強く、海岸沿いに住んでいたので、その辺りに住む、浦方(うらかた)とよばれる人達に一目置かれていた、いわば祖父は無頼(ぶらい)の徒(と)であった。僕はその祖父が苦手だった。

「まあまあかな」

僕は、おずおずと答えると、自分の部屋にさっさ

と引き揚げた。

一方、母親は武家の出で、みょうに物腰(ものごし)が丁寧だった。

母方の家は、士分ではあったが禄(ろく)はそう高くなく、明治になって、養蚕(ようさん)から生糸の商売をしていたらしい。今も、博物館の裏に屋敷跡が残っている。

その日は、午後から雪が降り始めた。雪は次第に強くなり、夜には一面雪景色になった。

僕は、風呂からあがると部屋に籠(こも)り、机に向って頭をがじがじと掻いた。

すると、フケがぱらぱらと落ちて、木目調のデコラ張りの上に、外の雪のようにうっすらと積もった。それをせっせと集め、丁寧にプラスチックのハンコ立ての中に放り込んだ。

坊主頭なので、掻きやすく、掻くとすっきりするので、僕はそれを日課にしていた。

フケを溜め込んでにやにやしているのは、あまり褒(ほ)められた様ではないが、なにせそれが割と大事な日課なのだから仕方がない。

そうやって、勉強にとりかかる準備をする。試験

等が差し迫っている訳ではないが、一応、復習をする事にしている。

半年前なら考えられなかった事だが、来年は高校入試があるので、さすがに、しなくてはいけないという気になっていたのだった。

遠くで、機関車の汽笛の音がした。
音は、積もった雪に吸い取られ、弱々しく消え入りそうに響いた。

近くで蒸気機関車の汽笛の音がした。

続いて、ガチャン、ガチャンという車輪が動く音が聞こえてきた。

真理子は眼を開けた。

いつの間にか眠っていたらしい。机にうつ伏せになっていた顔を上げた。

窓の方に目を遣(や)ると、曇りガラスの桟(さん)の上に雪が積もっているのが透けて見えた。真理子は、立ち上がって窓を開けた。

庭は一面雪景色だった。

目の前の金木犀の木に、綿を被せたように雪が積

もっている。

真理子は、窓から首を伸ばして、辺りを見廻した。

雪は止んでいて、ひんやりとした空気が、真理子の顔に当たり、やがて、少し痛みを感じた。

吐く息は白く、部屋の光を反射した。

真理子は、微(かす)かに笑った。

なんだか嬉しかった。

毎年雪を見ると嬉しかった。

雪は、嫌な物を覆い隠してしまうか、見えにくくしてしまうからか、嫌な音を吸い取ってしまうからか、気持ちを落ち着かせる事が出来た。雪は、人間にとって、安心と猶予(ゆうよ)を与えてくれる空からの贈り物なのかもしれなかった。

年が明けて、昭和４６年になった。

ベトナム戦争は、相変わらず泥沼の様相(ようそう)を呈していて、アメリカの憂鬱(ゆううつ)は、世界中の知るところとなっていた。

アメリカの舵取りは、多民族国家であるが故に難しく、経済と自由という言葉に単純化することで、

よりシンプルに統制しようとしているきらいが見受けられた。

日本の様に、殆(ほとん)ど単一民族で占められている国では、阿吽(あうん)の呼吸などといったものも成り立つだろうが、そうでなければ、腹芸(はらげい)という言葉も、絵に描いた餅に他ならない。

合わせて言うならば、日本は単一民族国家ではなく、単一民族国家に、長い年月をかけて成ったのである。

元々異民族同士が、征服、同化を繰り返し、長い年月をかけて成ったのである。そもそも、日本人の同化意識というものは、その辺りから来ているものかもしれない。従って、単一民族か否かという議論は無意味である。そこに居続ける限り、時間が全てを解決する。

正月の稽古は四日からやる、そう決めていた。そして、その後近所の和霊(われい)神社に初詣(はつもうで)に行く、それがいつの間にか決められている、部活の伝統というものらしかった。

冬の稽古は、最初のうちは足が悴(かじか)んで辛かったが、動いていればすぐに暖かくなり、気にならなくなった。

年末から暫く稽古をしていないので、剣道着が乾いているのも有難かった。

その日、敦夫と正美は来ていなかった。

敦夫は、田舎の親戚の家へ行くという理由で、正美は、宗教上の理由でという事らしい。

「さあ行くか」

初稽古もそこそこに済ませた僕達は、ぞろぞろと、連れ立って神社に参詣(さんけい)した。

「賽銭はなんぼがええかな」

春樹が、僕に聞いた。

「十円に決まっとるやろ」

期待した答えなので、春樹は黙って頷いた。

他の者も、耳聡(みみざと)く聞きつけてそれに倣(なら)った。

皆は、それぞれ財布から、ごぞごぞと十円玉を取り出すと、バラバラと、大きな賽銭箱に放り込んだ。そして、柏手を打って、新たな一年を祈願した。

「なに祈ったんや」

西が加藤に話かけている。

「そりゃ、今年の県大会優勝や」

「大きく出たな」

加藤はニヤニヤしている。

僕らは、ぞろぞろと境内を抜け、鳥居を抜けると、コンクリートの太鼓橋に差しかかった。

僕は、ちらっと後ろを横目で振り返った。

一年生が、後から少し離れて歩いている。

山本が抜けて四人になっている、こころなしか寂しい気がした。このままでは、来年はチームが組めない。まあ新学期になれば新入生が入ってくるだろうが。

太鼓橋（たいこばし）を渡り切ると、公園があり、その道の両側には露天商が軒を並べて、縁起物やら、甘酒やらを売っていた。

同級生の家も店を出していた、同級生もその下の弟も時々店に出ているが、今日は出ていなかった。

弟は、家業を継ぐ気満々らしかった。代々、そういう生業（なりわい）なのである。

西が、ふいに僕の奥襟（おくえり）をつかんで引っ張った。

僕は後ろに引っ張られて、襟首(えりくび)に喉を絞められ、思わず咳をした。

「なにするんや」

西は答えず、ふんと、顎(あご)で向うを差した。

西の目線の先を確認した僕は、あっと小さく声を上げると、春樹と加藤の学生服の袖(そで)を引っ張った。

四人は、素早く露店の影に隠れた。一年生はそれには気付かず、そのまま歩いて行ってしまった。

僕らは、露店の影に隠れて様子を覗った。

公園の向こうの隅から、私服の敦夫が現れた。敦夫は一人ではない、真理子と一緒だった。

「あのボサ公」

西は愕然(がくぜん)として、次の言葉が出せないでいた。

敦夫は、鉢合わせした下級生に、悪びれもせず、にこにこして話しかけていた。

「あいつ、親戚の所やなかったんか」

僕は呟き、敦夫達を見詰めていた。

僕らは、敦夫と真理子をやり過ごした後で、帰り道の途中にあるお好み焼き屋で話し合った。

「許せるとおもうか」

西が、焼けたお好み焼きに、ソースを塗りながら言った。
「まあ、永井の事やからな」
僕は、物分かりの良い風を装(よそお)いながら言った。
「ボサ公だけが許されるのか」
西は、さっきからずっとソースを塗っている。
いつまで塗っているのだ、と僕は思った。
「許せんな」
春樹が思いついたように言った。顔は怒っているようだった。
どうも、敦夫の旗色は良くない様子だった。
「次の試合は、あいつは外そうやないか」
加藤が、お好み焼きを切りながら、何食(なにく)わぬ顔で言った。
加藤は、最近試合から外されることが多く、めっきり出場機会が減っていた。
仕方ないか、と僕は思った。
「そうするしかないやろ」
西は、躊躇(ちゅうちょ)無(な)く言った。
西のお好み焼きは、ソースを塗りすぎてべたべた

になり、もはや、お好み焼きと呼べる代物ではなくなっていた。

　その翌日、敦夫は皆に吊るしあげられ、試合のメンバーから外されてしまったのである。

　宇和島の冬は寒い、この地方は山陰の気候が反映されるからだ。関門海峡が日本海に開いている為、そこを通って寒気がやって来る、その寒気が、鬼ヶ城（おにじょう）と呼ばれる標高千二百メートル程の山にあたり、雪を降らせた。

　セバスチャン神父は、チャペルの前に積もった雪の、雪かきをしていた。

　雪かきをしていると、段々と彼の禿（は）げあがった額から頭頂（とうちょう）にかけて、汗がにじんできた。

　彼は、白い厚手のジャケット着込んでいて、そのでっぷりとした体形から、まるで雪だるまが雪かきをしている様に見えた。

　彼の妻の母親は、一時持ち直したものの、年末に亡くなってしまっていた。

　元々、教会の信者だったので、葬式はここで挙げ

たのだった。

神父は、雪かきの手を休め、腰を起こして、スコップを杖にして背筋を伸ばし、教会の前の道に目を遣った。

教会の敷地は、前の道路より幾分(いくぶん)高くなっていて、そこに立つと、道路から市街にかけて広く見渡す事ができた。辺りは一面雪景色で、白と黒に塗り分けられていた。

道路のアスファルトは、積もった雪に覆(おお)われて見えなくなっている、その上を、時折、タイヤにチェーンを巻いた車が、チャラチャラと音を発てて走り抜けて行った。

まだ日曜日の早朝なので、こんな日は誰も家から出て来ない、殆(ほとん)ど人通りは見受(みう)けられなかった。

チャペルの横にある自宅から、玄関のドアを開けて、エルナが外に出てきた。

エルナは、黒い制服を着て、毛糸の薄ピンクのマフラーを巻いている、きょろきょろと辺りを見廻して、白い息を弾(はず)ませている。

エルナは、やがて、白クマの様に立っている父親

を見つけると、彼の背後から声を掛けた。

「ちょっと、学校へ行ってきます」

　声を掛けられて、父親はゆっくりと振り向いた。

「授業があるのですか」

「いえ、クラブです」

　父親は、ああと頷くと、気をつけて行ってらっしゃいと言った。

　左右に束ねた髪を躍(おど)らせながら、出て行く娘の姿が見えなくなると、セバスチャンは、再びスコップを握り直し、雪かきを始めた。

　雪かきをしながら、セバスチャンは、故郷で兄達と木ゾリで遊んだことを思い出していた。その頃のほうがもっと寒かったと思ったが、馴れてしまえばやはり冬は寒かったのである。

　二番目の兄は、やがて戦争に行き、オーストリアで戦死した。セバスチャンにしても、志願して兵役(へいえき)に就(つ)くつもりだったが、敗戦となってしまったのである。

　二番目の兄は、セバスチャンを何かにつけ可愛ってくれたので、セバスチャンも兄を好いていたし、

感謝もしていた。

兄は、いずれ家を出る身の自分と末の弟を重ね合わせていたのかもしれない。兄は、国のため、故郷の為、そしてシュトラウス家の名誉の為に兵役に就いたのである。

セバスチャンは、胸元の十字架を握りしめた。掌にちょうど収まる大きさで、冷たくなった掌に軽い痛みを感じて思わず握っている力を緩(ゆる)めた。

それは、兄が家を出る前にセバスチャンにくれた物だった。

「神の御加護(ごかご)がありますように」

彼はそう言うと、彼が子供の頃から肌身離さず持っていた銀細工(ぎんざいく)のペンダントを、弟の首に掛けてやったのだった。以来、それはずっとセバスチャンの首に掛かっている。

セバスチャンは、兄の戦死を知った時、悲しみと同時にひどく悔(く)やんだ。

もし自分が十字架を受け取らなければ、兄は死なずに済んだのではないか。兄は自分の身代りになったのではないか、自分はそれを受け取るべきでは無

かったのではないか。

　それは、今も彼も心の中で決して小さくなってはいなかった。しかし、それは最近になって少しずつ、別のものに、彼自身がはっきりと意識出来ないうちに変化して来ているように感じられた。

　セバスチャンは自宅の茶色い木のドアを見た。それは、彼のこだわりで、特別に建具師（たてぐし）に造ってもらったものだった

　そのドアが開いて、今度は正美が出てきた。無愛想な表情で、父親を見つけると、お早うございますと言った。そして、彼は、足早にセバスチャンの横を通り過ぎようとした。

　その後ろ姿にセバスチャンが声を掛けた。

「あ、正美」

　呼び止められて、正美はまるで警戒するかのようにゆっくりと振り向いた。

　セバスチャンは、握っていた十字架を首から外すと、息子の手を取ってそれを握らせた。

「これは？」

　正美は怪訝（けげん）そうな顔をした。無論（むろん）これが何時も父

親の首に掛かっている事は知っている。
「これをあなたに」
　セバスチャンはそこで一度言葉を切った。そしてじっと息子を見詰めた後で言った。
「これをあなたに返します」
　そう言われた息子は、あっ気にとられた表情で父親を見詰(みつ)め返した。
　セバスチャンは笑うと、息子の両肩を両手で包み込むように軽く叩いた。
「さあ行きなさい、クラブ活動があるのでしょう」
　そう言って自分は背中を向けると、再び雪かきを始めたのだった。
　正美は少しの間、困ったような顔をして立っていたが、やがて、受け取った十字架を学生服のポケットに仕舞い込むと、門を開けて出て行った。
　息子は、死んだ兄に似ていた。
　セバスチャンがそれに気づいたのは、正美が中学校に入学した頃だった。
　　正美は、髪の色こそ黒いが、その深い碧い瞳や顔立ちが兄にそっくりだった。もともとそうだった

筈なのに、それまで気付かなかったのが不思議な気がしたのだった。

兄は死んだのではなく、その命を自分に託したのではないか、いや、きっとそうなのだ、そう思った。

だが、このいまいましい息子が兄の生まれ変わりであるなどとは、到底承服し難い話であったのである。

セバスチャンは，雪かきをしているままの姿勢で手を止めて、振り向き加減に息子の後ろ姿を見送ると、軽く溜め息をつき、眉間に皺を寄せて、しかしはにかむように笑った。

「おーい、ちょっと手伝ってくれ」

職員室から帰ってきた敦夫が、練習を終えて帰ろうとしていた僕らに呼び掛けた。

まだ三月の初旬なので寒い、そそくさと引き上げようとしていた僕達は、一様に不快な表情を敦夫に向けた。

何故、この主将はこれほど皆に軽んじられるのか、首を傾げるところだが、それが敦夫の良いところ

なのだろう。
　皆の不機嫌にもかかわらず、敦夫はにこにこしている。
「なんや、はよ言え、冷(ひ)やい」
　正美が両手に持った面と竹刀を、小刻みに震わせながらぶっきらぼうに言った。
「職員室から、防具を運んでくれ」
　敦夫が答えた。
「誰の防具や」
「俺らの防具に決まっとるやろ」
「なにを寝とぼけとる、俺らの防具はここにあるやろ」
「いや、新しいやつや」
　皆、今度は一様に、おおっといった顔で敦夫を見た。
「それって、まさか」
「さっき、土居先生に呼ばれたんで、新しい防具が来とるゆうて」
　敦夫は眼を細め、口を少し尖らせて変な表情をした。どうやら、笑いを堪(こら)えているらしい。

「この頃(ごろ)俺ら成績ええやろ、それで土居先生が学校に頼んでくれたらしいんや」
「どんなやつや」
　西が敦夫に訊いた。
「そうやなあ、黒い胴や、それと面も籠手も黒いな」
　皆は一斉に自分の抱えている防具を見た。
　どれもこれもみな継ぎがあたっている、どれ一つとしてまともな物はない。一年生の防具にいたっては、組み合わせた竹がむき出しの竹胴(たけどう)だ。二年生の防具になって初めて膠(にかわ)の様なものでコーティングしてある、しかし、それらも既にガタがきている。籠手も面も同様である。
　僕達は少し間そこに立ち竦(すく)んだ。多分、そんなに長い時間ではなかった筈だったが、やけに長い間のように僕らには感じられた。
「行こか」
　僕は言った。
　皆は、それぞれ持っていた竹刀と防具を床に置くと、体育館の入り口付近に陣取って居る、卓球部と体操部の間をすり抜けて、いそいそと職員室に向か

った。

　大分傾いた午後の光が、体育館の二階の窓を通して入り込んできていて、寒々としている、もう床に光は届いていない。

　校舎を一つ通り抜ければ職員室がある。途中同級生の芳村とすれ違った、芳村は体操部で、体育館に向かう途中らしかった。

　彼女は、血相を変えて、あわただしく通り過ぎて行く僕に、かるく手を挙げたが、僕はまるっきり無視をした。芳村は、ドヤドヤと過ぎ去る僕達の姿を、不思議そうに見送った。

　職員室に入ると土居先生が待っていた。先生は僕らが入って行くと、机に向かっていた顔をあげ、老眼鏡越しに僕らを見た。

「おお来たか」

　低い声で言うと、少し荒い僕らの息を感じて笑った。

「そこに新しい防具がきとる、はよ持っていけ」

　先生は、職員室の後ろの隅に並べてある、５個の防具を指差した。

　そこには、黒光りする真新しい防具が、丁寧に床に並べられていた。僕達は、めいめいがそれを手にすると、その重さを忘れたかのような足取りで職員室を後にした。

　部室の中に暖房は無い、窓もない、誰もそこに長居はしたくないが、今日は違っていた。そこには、一年生を早く返したイガグリ頭が六つ、にやけた顔をして座っていた。
「画期的やな」
　加藤が言った。
「これ、なんぼぐらいするんやろな」
　僕は、両手で新しい胴を眼の上まで持ち上げて、しげしげと眺めた。
「さあな、俺らの小遣いでは買えんやろ」
「うん、買えんな」
　僕らは、胴を腹にあててみたり、まだそりの付いてない面を被ってみたりした。
「あっ、そうや、剣道着も買わないかんやろ」
　春樹が皆を見回した。

「黒いやつかな」
「当然やろ」
　胴着は、皆、白い薄い生地に斜め格子に黒糸で補強をいれたものを着ていた。ただ一人敦夫だけが厚手の紺の胴着を着ている。
「こんなやつか？」
　正美が、横に座っている敦夫の胴着の袖をつまんで持ち上げた。
「いやちょっと違うな、もうちょっと安いやつ」
　西が言った。
　皆はまた無言に戻って、それぞれがニヤニヤしながら空想に耽(ふけ)った。
　狭い部室の天井からは、裸電球がぶらさがっている、部室の戸を閉め切って居ると、少しは暖かいような気がした。
「これで俺ら、もうちょっと強うなれるかな」
　誰かが言った。
「いや、無敵やろ」
　西が答える。
「サンダース軍曹の自動小銃みたいなもんかな」

僕は想像した。映画コンバットのサンダース軍曹は無敵だ、彼の自動小銃は次々と敵のドイツ兵をなぎ倒す、ドイツ兵のシュマイザーは玩具(おもちゃ)同然で、彼らの銃弾は決してサンダース軍曹には当たらない。

僕は思わず竹刀を脇に抱え込んで、その先を加藤に向け、銃弾を発射した。

ドイツ兵の加藤は、もんどりうって部室の隅に積み上げてある、着古した胴着の上に倒れ込んだ。僕はニヒルに笑い、銃を捧(ささ)げつつに持ち上げた。

「やめんか！」

誰かが大声で怒鳴った。

正美だ。正美は僕を睨(にら)みつけ、座ったまま両膝にこぶしを押し付けて体を震わせている。

またか、と僕は思った。

「なんやお前、自分の国がやられるのがそんなに嫌なんか」

僕は、いきなり一喝(いっかつ)されてひどく腹を立てていた。

「なんやと」

正美は、立ち上がると、いきなり僕に突っ掛かってきた。僕は身構える間もなく、二人は取っ組み合

いになった。

　なにせ、二人とも中学生にしては大柄なので、部室の中は騒然となった。その辺りの棚に体があたる度に、あれこれ物が降ってきた。

　暫く取っ組み合ったり殴り合ったりした後、やっと二人は引き離された。

　西に、後ろ手に引っ張られながら、正美ははあはあと息を切らしていた。しかし、それは僕にしても同様で、まだお互い興奮状態が続いている。

「俺の国はドイツ兵やない」

　正美が叫んだ。

「ほう、そしたらお前は日本人やと言うんか」

　僕は意地悪く言った。

　正美は再び形相を変え、西を振りほどこうとした。

　敦夫が二人の間に割って入った。

　敦夫は、僕らに言った。

「そしたら、朝鮮人の俺はどうしたらええんかいのう」

　僕と正美は、後ろから皆に羽交(はが)い絞めにされながら、横目で敦夫を見た。

敦夫は、眉を八の字にし、眉間に皺を寄せ悲しそうに笑っていた。

その事は知っていた。ここにいる皆が知っていた。知っていたが、誰も口にした者はいなかった。

僕らは暫く睨み合っていたが、やがてのろのろと、落ちていた自分の竹刀を拾い上げたのだった。

学校の東西の通学路には桜の並木があった。

新学期になると、その枝いっぱいに薄ピンクの花を咲かせていた。

真理子は、そう長くない家からの通学路を歩いて行く。鬼ヶ城越しに朝日が差し込んで、花弁を通して目に入ってきた。真理子は、立ち止まって見上げていた花から目をそらすと、校門の方を見遣った。

まだ朝早いので、登校してくる者は少なかった。

真理子は川沿いの道をゆっくりと歩いた。べつにわざとゆっくり歩いている訳ではなかったが、自然とそうなっていた。

「なんや、今日は早いんやな」

すぐ後ろで声がした。

真理子は驚いて振り返った。逆光(ぎゃっこう)でよく見えなかったが敦夫だった。真理子は、眩(まぶ)しそうに眼を細めた。

「家に寄ったら、今日は早(はよ)う出たゆうておばさんが言(ゆ)うたけんな」

敦夫はにこにこしている。

真理子は、なにか言おうとしたが声にならなかった。

その次の瞬間、強い風が吹いて、桜の花びらがそこら中に舞った。

雪だ、真理子は思った。

真理子は、落ちてきた花びらを手のひらで受け止めると、指先で抓(つま)んだ。

「冷とうない」

真理子は呟いた。

「そりゃあ、花やけん冷とうないやろ」

敦夫は笑って答えた。

二人は並んで校門までの道をゆっくりと歩いた。去年までは、そこは土の地面がむき出しの道路だったが、今は綺麗に舗装されていた。

「俺らもいよいよ三年生やなあ」
　真理子は黙って頷いた。
「もうすぐ、県体予選があるんで、頑張らないかんな、最近防具も新しゅうなったし、みんなやる気満々や」
　敦夫は一人で喋(しゃべ)っている。
　突然、戦闘機の衝撃波の音が鳴り響いた。
　敦夫は眉をひそめて空を見上げた。
「なんや、朝っぱらからやかましいのお」
　敦夫の語気に、真理子は驚いて顔を覗き込んだ。
「いや、飛行機の音がやかましいなと思うて」
　敦夫は慌てて、笑い顔をつくった。
「え、何の音」
「いや、アメリカの戦闘機の音」
「聞こえないよ」
「えっ、そうなんか」
　今度は、敦夫が不思議そうに、真理子の顔を覗き込んだ。

　県体予選は六月に行われる、大体初旬にあるので、

うっとおしい梅雨の季節は回避できる。まだ新緑が残っていて、校庭の森の木々からの光が、付近の校舎を緑色に包み込んでいる。

　僕は相変わらず、教室から校舎の外を見てにやにやしている、クラスの皆は、僕のことを変な奴だと思っているに違いないと、僕は思っていた。

　当日は授業は行われない、朝掃除をすませて、ホームルームで皆が集まり、それぞれの会場に移動するのである。

「健一、いつまで机に座ってニタニタしてるんや、行くぞ」

　クラスの大橋が僕に声をかけた。大橋はバスケット部で、その長身から、誰が見ても納得できる組み合わせといえた。

「あっ、ちょっと待ってくれ」

　僕は急いで立ち上がると、大橋と並んで部室に向った。

「勝（まさる）、バスケット部の会場はどこや」

　僕は大橋に訊いた。

「俺は東中や」

「遠いな、俺らは南中や」

部室に着くと、皆が待っていた。めずらしく敦夫もいた。それは、僕がかなり遅刻したことを意味していた。

「はよせんか」

正美が言った。

すまん、すまん、と僕はいつも敦夫が言っている台詞(せりふ)を口にした。

僕らはそれぞれに自分の防具と竹刀を持ち、バス停まで歩いた。公園前のバス停までは、三百メートルほど歩けばよかった。二年生と、新しく入った一年生とで十五人が、ぞろぞろと橋を渡って歩いた。

橋はまるで僕らの学校専用で、百メートル川下には和霊神社の参道になっている立派な太鼓橋がある。しかも、川上百五十メートルにも橋があり、さらにその五十メートル上流に国道の橋がある、つまり三百メートルの間に橋が四つもあるのである。何故(なぜ)なんだ、と僕はつねづね思っていた。

先頭を行く土居先生が、きょろきょろと辺りを見回している、その度に、きれいに刈り揃えられた白

髪交じりの鼻髭が、風に吹かれて小刻みに揺れていた。

　まるでオットセイのようだと、僕は内心おかしかった。先生自体が、部活の試合に参加する事など滅多になかった。というより、多分初めてだったろう。

　僕達は市内バスの、なるべく後部座席の方に席を取り、十五分程揺られた後、会場の南中に着いた。

　南中の体育館には、各校の見慣れた連中があっちこっちに陣取っていた。

　敦夫は相変わらず、そのあっちこっちに顔を出し、愛想を振り撒いていた。

「ボサ公、相変わらずやってるで」

　西が、竹刀に鍔を差し込みながら言った。

「ほっとけ」

　正美は、竹刀袋から竹刀を取り出しながら、西を見ずに冷たく言った。

　僕らは、別に他校の連中と仲が悪かった訳ではない、街で出会ったりすると話したりするし、個人的に仲の良い人間もいた。しかし、試合となるとそうはいかない、特に今日の様な大事な試合では、特に

そうだ。

「何(なん)かの作戦かな」

わざとらしく春樹が言う。

「そんな訳あるか、ただの性格や」

僕は答えた。

試合はいつも通り個人戦から始まる。僕は、一回戦を勝ち上がれば、東中の善家(ぜんけ)とあたる組み合わせになっていた。僕はラッキーだと思った。善家は東中の大将だが、個人戦に対する思い入れの強い人間だった。ここで、いつものセコイ作戦を展開すれば、僕自身は疲れずに、善家を疲れさす事ができるのである。

県体予選なので、回りくどい来賓挨拶などはない、試合は早速(さっそく)に粛々(しゅくしゅく)と始まった。

一回戦が始まった。僕は鶴島中のメンバーとあたる事になっていた。長身の男だが、さ程のスピードも技もない、僕は、開始早々面を取ると、すぐに相手が出ようとして手元(てもと)が上がったところを、小手をきめて二本勝ちした。

二回戦の相手の善家も、無難に勝ち上がって来て

いた。

　他のコートでは、正美が一回戦で対戦している馬場と試合をしている最中だった。

　正美は、のらりくらりと馬場の竹刀をかわしていた。馬場はなかなか決められず、苛立っている様子だった。試合は三分間二本勝負なので、二本とるか、一本とって一本差で時間切れになるかで、勝負が決まる、決まらない場合は、延長戦で決着がつくまでやる。

　まだ二人とも一本も取っていないまま、二分を過ぎていた。馬場は焦っていたが、正美ははなから勝つ気が無いので、焦ってもなければ苛立ってもいない。

　正美が不意に前に出た、無防備な出かただった。馬場はそこを見逃さなかった。すかさず面に乗るように打ち込んだ。馬場は面を取り、そのまま時間切れとなり一本勝ちした。

　僕はその試合を見届けると、まるでどこかの悪代官のようにほくそ笑んだ。

　僕は、そそくさと自分のコートに戻り、次の試合

の準備をした。

　善家の剣道はそんなに早くはなかったが、僕はあまり得意な相手ではなかった。

　善家との試合は、正美と同様、のらりくらりと試合をする僕と、是が非でも勝ちたいと思っている善家との戦いに終始した。

　僕は、適当に攻撃を仕掛け、善家の打ちをかわし続けた。善家は思い入れの強さから、徐々に冷静さを欠いていった。それは、面鉄（めんがね）を通して見える表情からありありと伝わってきた。

　多分、相当に体に力がはいっているだろう。

　僕は正美同様、終了間際に前に出て面を取られ、一本負けした。

　適当な準備運動にはなったと、僕は満足した。

　敦夫達も、それぞれ試合を終えている様子だった。僕はトイレに行くために体育館の外に出、そして用をすませて体育館に戻ろうとした。

「大内君」

　呼ぶ声に振り向くと、そこに正美の妹のエルナが立っていた。

「ああ、来とったんか」
　エルナは明るい色の髪を左右に束ねて、にこにこしている。
「どう、勝てそう？」
「いやわからんよ、今個人戦をやってるとこや、団体戦は午後からやからな」
　そう言って僕はぎょっとした。
エルナの後ろに、正美の父親のセバスチャン神父が立っていたのだ。
「健一、どうですか調子は」
　セバスチャン神父は笑顔で話しかけてきた。
　僕はまずいと思った。以前、父親が顔を出した試合で、正美が緊張のあまり、ガタガタに調子を崩した事があったのだ。
「あ、神父来られてたんですか」
　僕は、セバスチャン神父の幼稚園の出身だった。
「ちょっとこちらの方に用事があったものですから、ついでに寄ってみたのです」
　神父は照れ臭そうに笑い、鼻の下を人差し指で掻いた。

嘘だ、と僕は思った。

だいいち、神父が照れ臭そうに鼻の下を掻く時には、何か胡散臭(うさんくさ)い感じがした。僕の順番の前で、園児に配るお絵かき帳の在庫が切れた時がそうだった。

エルナが神父の後ろで、僕を見て首を横に振っている。彼は、わざわざ息子の試合を見に来たのだ。

「みんな頑張ってますけど、個人戦は負けたみたいです、正美もさっき二回戦で負けました」

「そうですか」

セバスチャン神父は、あからさまにがっくりと肩を落とした。

「午後からは、団体戦がありますから」

「それには勝ちますか」

「もちろんです」

神父は再びにっこりと笑った。

「頑張るのですよ」

彼は僕の肩を軽く叩くと、娘と体育館の二階へ上がって行った。エルナが振り向いて手を振ったので、僕は引きつった笑顔で彼女に手を振った。

困ったことになった、これでは正美があてに出来

ない。いっそのこと、正美には黙っていようか、いやどっちにしろ狭い体育館の中だ、きっと正美は父親を発見するだろう。

　僕は、ぶつぶつ呟きながら体育館の中に戻った。

　戻ってみると、個人戦は終盤に差し掛かっていた。第二コートに皆が集まっていたので、僕はその中に割って入った。

「おお、健一どこ行っとったんや、西の試合が始まるぞ」

　敦夫が振り向いて僕に言った。

「何回戦や」

　僕はなにげなく訊いた。

「準決勝や」

　加藤が答えた。

「準決勝？」

　おもわず僕は眉間に皺を寄せた。

「どうゆう意味だ」

「しるか！」

　正美は言い放った。

　準決勝の西の相手は馬場だった。そして、試合は

僕らの戸惑いを無視するかのように始まった。

　試合は、予想に反して白熱した展開になった。お互いの打ちが決まらず、一進一退の状態が続いた。

「あそこまでやる必要があるんか」

　加藤が言ったが、誰も返事をしない。

　二分を過ぎた頃に馬場が小手を取った。僕らはこれで終わりだと思った。しかし、西は小手を取り返し、試合は延長戦にもつれこんだ。

　あきらかに西は勝とうとしていた。

「あのやろう」

　正美が歯ぎしりした丁度その時、西が馬場の出小手を打ち、旗が二本上がって西が勝ってしまった。

「抜け駆けしやがって」

　正美は言った。

　これで西は決勝戦で負けても、個人で県大会に出場できる。案の定、西は決勝戦で善家にあっさり負けて準優勝に終わったのである。

　西は、試合を終えると僕らのところへ戻ってきた。そして、決まりが悪そうに、汗のにじんだ坊主頭を掻きながら、「いやー、善家はやっぱ強いわ」と言っ

たが、誰も西を見ようとすらしなかった。
　西はうなだれて、こそこそと防具を抱えて僕らの控えの場所に引き上げたのだった。
　まったく実に予想外の事が起きる、どうも僕らの前途は多難で、当てにならなくなってきていた。

　個人戦が終わり、僕達は昼食をとった。
　めいめいがそれぞれの弁当をひろげ、黙々と食べていた。僕達はこれからの試合に集中する必要があった。なにせ、この一年間の当面の目標が迫っているのだ。
「最初の試合はどこかいのう」
　敦夫が弁当を食べながら言った。
「鶴島（つるしま）やないのか」
　春樹が答えた。
「楽勝やな」
　西が言った。
　楽勝、はたしてそうなのか、僕は思った。
　正美はちらちらと二階を見上げている、そこには正美の父親がいるはずだった。こんなことで僕らの

目的は達成できるのか、神のみぞ知るだった。

外で、ドカーンという戦闘機の衝撃波の音がした。三機の編隊らしく、三連発で空気を震わせた。

試合は始まった。

リーグ戦で各校他の三校と戦い、優勝校が県大会に出場できる、つまり優勝が最低条件なのだ。

鶴島中との試合は、僕の心配通り楽勝とはならなかった。

先鋒の春樹は胴と面で二本勝ちしたものの、体力を失った西と、思わぬ父親の出現で調子を崩した正美が負けて後がなくなったが、副将の僕と大将の敦夫が、それぞれ二本勝ちして何とか三対二で勝った。

次の、南中との試合は困難を極めた。

まず、先鋒の春樹が、鍔(つば)ぜりから相手に引き胴を許し、そのまま時間切れで負けてしまった。

つづく次員の西は、ねばって時間切れで引き分け、そして中堅の正美は、どたばたと動きに精彩を欠いたが、相手が小手を打ってくるところを、竹刀の右で擦(す)りあげて面をきめて一本勝ちした。

そのあと僕は二本勝ちしたが、大将の敦夫が馬場

に何時(いつ)も通り二本負けをし、引き分けてしまった。
　従って、一勝一分け同士の東中との試合に勝たなければ優勝は無いという状況だった、つまり勝った方が優勝なのだ。南中は一勝二分け、鶴島中は三敗で試合を終えていた。
「勝てるか？」
「勝つしかないやろ」
「健一、お前んところでなんとかせい」
　正美は僕に言い、皆は敦夫をちらっと見た。敦夫はふくれっ面をしていた。
　お前んところでなんとかせい、わかりきった話だった。もとより、そういうことで決めてあるオーダーなのだから。
　コートの左右に分かれて、両チームが礼をし、先鋒の春樹を残し僕らはコートの隅にさがった。
　春樹の動きは軽快だった。僕は胸をなでおろし、残りの二人のどちらかが勝ってくれるのを期待していた。
　しかし、春樹はいつまでたっても一本が取れず、焦りの色を濃くしていった。

引き分けで終わる訳にはいかなかった、なにせ次の二人はおおよそあてに出来ない状況なのだ。

終了間際に春樹は勝負にでた。相手の手元が上がった瞬間、飛び込んで小手を打ちこんだ、だがしかしそれは誘(さそ)いで、相手は春樹の小手を上段に振りかぶって抜き、面を打ちこんだのである、春樹は終了間際に手痛い一本負けをしてしまった。

次員の西は、なんとかかんとか引き分けに持ち込んだ。しかしこの時点で、もはや僕のところで何とかする事は出来なくなってしまったのである。

それどころか、正美が負ければ、もうほとんど勝ちは無くなってしまうのである。

正美は自分を鼓舞するかのように、面の上から籠手をはめた右手で、自分の頭をさかんにぱんぱんと叩いていた。責任重大だった。

正美はよく動いた、いつもの応(おう)じ技(わざ)主体の剣道ではなく、積極的に前に出た。そのせいか、徐々に相手の手元が上がり、正美は大きく前に踏み込んだ次の瞬間、胴を抜いた。

見事な抜き胴だった。正美は一本勝ちをした。

正美と入れ替わりに、僕はコートに立った。後が無いのは僕も同様だった。一見一対一で五分の様に見えるが、善家に勝った事が無い敦夫はあてに出来ないのだから、どうしてもここで二本勝ちをしておく必要があった。

僕は胃が痛くなるのを感じながら、不安を振り払うかのごとく、最初からとばした。

どうせこの試合で最後なのだから、めいっぱいやろうというつもりだった。

だが、相手はそれを見透かすように、僕の竹刀をかわし続けた。明らかに善家に繋(つな)ごうという腹だった。

僕は思わぬ苦戦を強いられる羽目になった。僕もまた、引き分ける訳にはいかなかった。

僕は、二分過ぎに、鍔迫(つばぜ)り合いから相手が強引に押しこんだのを、すかさず後ろへ引きながら小手を打って一本にしたが、それで精一杯で、二本勝ちすることはできなかったのだ。

僕は、敦夫と入れ替わりにコートから出た。

すれ違いざまに敦夫と視線が合った。敦夫は面鉄(めんがね)

の奥で笑っていた、なんだか意味不明の笑顔のように僕は感じた。
「ボサ公の奴、勝てるのか」
　正美が呟いた。
「勝ったためしは無いな」
　敦夫が二本負けすれば、二勝二敗だが、勝ち本数で負けが決まる。
　僕達は、実にシンプルに覚悟を決めたのだった。
　しかし、実際には、試合は予想外の展開になった。いや、想定通りの展開になったと言うべきだろう。
　個人戦で体力を使い果たした善家は、もはや敦夫の敵ではなかったのである。
　敦夫は善家をあっさりと片付けると、意気揚々と引き上げてきた。
　僕達が忘れていた事を、敦夫だけが忘れていなかったのだ。
　僕らは素直に喜んだ。試合が終わって、皆が敦夫の頭を叩いた、坊主頭なので、敦夫は痛がって逃げ回っていた。
　正美は西を蹴飛ばしていた。西は、さかんに蠅が

手を擦るように謝っていた。

昭和４８年、アメリカはベトナムから撤退し、昭和５０年４月、南ベトナムの首都サイゴンは陥落し、１５年の長きに渡ったベトナム戦争は、ここに終わりを告げた。

アメリカの敗北は、軍備力だけで戦争に勝利する事は出来ないと、世界中に知らしめる結果となった。

民主主義と自由の流布（るふ）、それがアメリカの旗印である、しかし、その陰には様々な思惑（おもわく）が見え隠れする。だが、それはどんな戦争にも存在する。なかんずくアメリカの大義はまともなのか、戦いによって種を維持する、それが人間というものなのかもしれない。

人間はすぐに忘れる、技術は蓄積されるが、人間は６０年も経（た）てばリセットされる、人間は決して大人（おとな）になることはない。

もはや、技術の蓄積は人間を凌駕している、そんなことはないと思っているのは勘違いだと、一体どれだけの人間が気づいているのだろうか、蓄積され

た技術は確実に、稚拙なままの人間を駆逐するだろう、それは近いうちで、決して遠くはないのだということを知っているのだろうか。

誰かが言った、飢えこそ悪なのだ、飢える事そのものが悪である。

しかし僕は付け加えたい、そこが戦場で無く、自由で、飢えが無ければ、人間おおむね幸せになれるのではないか。

僕は帰省で宇和島の街を自転車で走っている、相変わらず夏の日差しはきつく、蝉があっちこっちでジージーと鳴いている、山は空の色を反射して蒼(あお)く浮き立っている。

僕達はそれぞれ大学生になったり、就職をして社会人になったりしていた。

僕達は県大会に出場したが、なにせ田舎者の僕らは、宿泊先の旅館が道後(どうご)温泉の街中(まちなか)にあった為に、うかれて夜あっちこっちを歩き廻り、挙句の果てにかき氷を食べすぎて、春樹以外は全員腹をこわし、あっさりと二回戦で敗退したのだった。

一足一刀一拍子（いっそくいっとういちびょうし）、それが剣道の究極の基本だと僕が理解するのは二十年も先のことだ。

僕は、家の使いで広小路にある親戚の家に行く途中だった。

駅前を通り過ぎようとして、僕は自転車を止めた。

そして、不安そうにきょろきょろと辺りを見回し、空を見上げた。しかし、そこに戦闘機の轟く轟音はなく、空は、一面雲一つなく真っ青に晴れ渡っていた。